

2026

しがの生協

No.207

TOPICS トピックス

第37回近畿地区生協・行政合同会議

- 1) 日 時：2026年8月19日(水)
- 2) 場 所：ピアザ淡海(滋賀県立県民交流センター)
- 3) 主 催：近畿地区生協府県連協議会
- 4) テーマ：『つながる力で安心して暮らし続けられる地域社会
づくりをめざして』

<特別報告>

「これからの協同組合の役割や期待について」

日本協同組合連携機構 前代表理事専務 比嘉 政浩 氏

<報告>

「全国の生協の事業と社会的取り組み

～持続可能な社会の実現を目指して～」

日本生協連渉外広報本部 松本 圭司 氏

「滋賀県の消費者行政について」

滋賀県総合企画部県民活動生活課 佐藤 勝也 氏

「食品ロス削減の取り組み」

コープこうべSDGs推進部 鬼澤 康弘 氏

「おかいものサポートカー・おかいもの便の取り組み」

京都生活協同組合くらしサポート推進部 原 晶 氏

「消費者支援機構関西(KC's)活動報告」

KC's 傘木 誠 氏

比嘉政浩氏

協同組合は、国連が重視する取り組みを担う組織として高く評価されている。その役割や期待に応えるため、学習・体験、交流、地域活動、人材育成、組合員参加を通じた態勢づくりが重要である。協同組合法制度を整え、持続可能で活力ある地域社会の実現に貢献してほしいと述べられた。



厚生労働省
伊藤幸司氏



滋賀県
佐藤勝也氏



日本生協連
松本圭司氏



コープこうべ
鬼澤康弘氏



京都生協
原 晶氏



KC's
傘木誠氏



国際協同組合デー企画

みんなで考えよう

「協同組合で創る地域社会の未来について」

(主催：IYC 記念滋賀県協同組合協議会)

日 時 2026年9月10日(木)
13時30分～16時30分

場 所 コラボしが21

開催目的 地域社会の未来に向けての協同組合が果たすべき役割について、若手職員が組織の枠を超えて考える機会とする。また、各構成団体間の役職員間の交流をすすめ、今後の業務やネットワークの向上をめざす。

講 師・
コーディネーター 小川 景司氏
神戸大学大学院
農学研究科食料
環境経済学講座助教



参加者 近畿労金、県漁連、
県森林組合、
県労福協、
県内JAグループ、
滋賀県生協連 計17団体・51名

小川景司氏による基調講演と、参加者によるワークショップを実施しました。

小川氏からは「持続可能な組織 地域社会の実現に向けて」をテーマに、農業経営と大学生による地域での実践から、これからの協同組合を考えるという内容で講演が行われました。

大学生が丹波篠山市の農家で農作業と農村生活を体験し、持続可能な農業や暮らし方、発見力・コミュニケーション力を養いました。若手の参加やアイデアをきっかけに農家の働き方や地域との関わり方にも変化が生まれました。

今回の取り組みを通じ、持続可能な地域社会の実現には、地域に関心を寄せる人々との関わりを生み出す仕組みづくりが重要であること、また、地域内外のニーズを結びつけるコーディネーターの存在や、景観や人のつながりなど地域の魅力を高める環境づくりが不可欠であることを学びました。

協同組合は多様な人々をつなぎ、共通の目標へ導く調整役として、地域の協力関係を育てる役割が期待されています。事業・サービス提供とあわせて、地域の組織と人をつなぎ、協働を促すことで、協同組合の存在意義と事業の持続可能性を高めることが必要です。



グループ別ワークショップ

基調講演を踏まえ、若手職員を中心に41名が8グループに分かれワークショップを実施しました。

- ①普段は関わりが少ない異なる協同組合の職員同士が対話できたこと自体に、非常に高い価値と刺激が得られました。
- ②単独の協同組合では解決できない課題も、それぞれの強み(商品軸、地域の特産、ネットワーク等)を持ち寄ることで新しいアイデア(協同組合フェス、SNS発信、学生向けマルシェ、リクルート連携など)が生まれる手応えが得られました。



最後に

今回の交流では、事業と活動へつなげる仕組みづくりへの期待とアイデアが多く寄せられました。また、各組合の若手職員からは、仕事内容や強みを知り合う継続的な交流を望む声がありました。引き続き、若手職員が自事業を発表する機会や、大学生に向けた体験事業、ESD、コーディネーター育成研修などを行っていくことが必要と感じました。

滋賀県立大学生生活協同組合

学内に広がるたすけあいの輪 — 熊本地震 被災地支援募金の取り組み —

2026年7月28日に発生した熊本地震を受け、当生協は発災の翌日には理事・監事で臨時意見交換を行い、翌々日には被災地支援募金を立ち上げました。取り組みは、食堂の副菜利用1点につき生協が10円を寄付する「食べて応援企画」と、各店舗レジ横に募金箱を設置する「直接募金」です。

中でも生協学生委員会は、自らも試験期間中であるにもかかわらず、店頭で熱心に呼びかけ、その活動は大学の公式案内にも掲載していただきました。研究室単位などでも募金がまとめられて生協に結集するなど、学内に「たすけあい」の輪が広がりました。

約1か月の取り組みで集まった募金は合計136,949円にのぼります。生協からの募金は直接熊本県の義援金口座へ、募金箱に集まった募金は全国大学生協連を通じ被災地へお届けします。組合員の温かいご協力に感謝申し上げますとともに、今後も支援の取り組みを進め、災害時の対応についても理事会等で議論を深めてまいります。

熊本地震 被災地支援募金
～たすけあいの精神で、今できる支援を～

2026年7月28日に発生した熊本地震を震源とする地震により、被災された皆様によりお見舞い申し上げます。
被災地の1日も早い復旧・復興を願い、滋賀県立大学生協は支援の取り組みを実施いたします。

選べる2つの支援方法

食べて応援!
「副菜運動寄付」

食堂の副菜1点につき、
生協が利用点数×10円を
寄付します。

利用者は通常価格で利用可能です。
安心して応援に参加できます!

対象：カフェテリア・ナシェリア

募金箱で応援!
「直接募金」

各店舗のレジ横に設置された募金箱へ、
現金による任意の募金を受け付けます。

お気持ちを直接届けたい方に。

対象：各店舗

実施期間：7/30(木)～8/31(月)
集まった寄付・募金については、熊本県公式義援金窓口または日本赤十字社を通じて被災地にお届けします。

滋賀県立大学生生活協同組合



滋賀県勤労者住宅生活協同組合

滋賀県児童福祉入所施設協議会 を通じた活動紹介

滋賀県住宅生協は、生活者の暮らしを支える相互扶助の理念のもと、住まいに関する相談やフードバンクによる食料品の支援など、地域に寄り添った福祉活動に幅広く取り組んでいます。

今回は児童養護施設で暮らす子どもたちへの支援です。子どもたちは退所後、生活資金の確保や社会的孤立、身元保証人の不在など、自立に向けた多くの課題に直面しています。

住宅生協では、子どもたちが将来への希望を持ち、安心して社会へ巣立ち健やかに成長できることを強く願い、長年にわたり支援を推進してきました。

2022年には、老朽化が進んだ「守山学園」の園舎改築を支援しました。2026年11月10日には「第24回レインボーフェスティバルチャリティーコンペ」を開催し、寄せられた善意と住宅生協からの寄付金を滋賀県児童福祉入所施設協議会へ贈り、退所児童の自立支援事業に役立てていただきます。



「守山学園」の改築



児童養護施設(鹿深の家)

8月1日（金）「能登復興の願いともしび会（金蔵万燈会）」の支援に参加しました

輪島市町野町 金蔵地区の正願寺で行われた万燈会に、昨年に続き活動支援に参加しました。かつて地域活性化のために始まった「金蔵万燈会」は、今では震災復興を願う灯火の行事として大切に受け継がれています。

各地から支援団体が集まり準備を進め、日暮れとともに灯がともると、静かな光の中で復興への想いを共有する時間となりました。生協も会場設営や進行補助を担い、地域の皆さんとともに場づくりに協力しました。

能登半島地震から2年半が経つ今も道路や家屋の復旧は続いていますが、社会からの関心が薄れ、支援が届きにくくなる時期に入ってきています。地域の方々が気軽に集い、交流し、気持ちを共有できる場として、万燈会が続いていくことを願います。

滋賀県生協連として、他生協連やボランティア団体と連携し、これからも支援を続けていきたいと考えています。



金蔵万灯会

能登半島地震被災地支援サロン活動を開催しました



9月5日～6日の2日間、石川県能登町および輪島市にて被災地支援サロン活動を、滋賀県立大学・龍谷大学の学生6名を含む、計10名で実施しました。

能登町上町公民館と、輪島市町野第2団地仮設集会所で、出来たての「たこ焼き」を提供しました。仮設住宅で不自由な生活が続ける被災者の皆さんを迎え、学生が寄り添いながら温かい会話が広がる交流の場になりました。参加された方々からは「美味しく、楽しい時間だった」との声が寄せられています。

また、災害NGO 結さんによる災害オリエンテーションも実施してもらい、学生にとっても復興支援や地域の未来を深く考える貴重な機会となりました。

能登半島地震から2年半が経ち、今も道路や家屋の復旧は続いています。地域の皆さんが気軽に集い、交流し、想いを共有できる場が求められています。こうした交流の場が今後も続き、心の拠り所となることを願っています。



滋賀県生協連 役員研修 生協法制度改正に向けた学習会を開催しました

7月17日（金）滋賀県生協連と会員生協の役職員16名が参加し、日本生協連 常務執行役員 多村孝子さん、法務部 菅本麻衣子さんを講師に生協法制度見直しに向けた学習会を開催しました。

これまで生協は、組合員のくらしを支えるだけでなく、地域の困りごとに寄り添いながら、さまざまな社会的な取り組みを進めてきました。災害時の支援や買物に困っている方へのサポート、地域の見守り活動など、生協の社会的取り組みに対し地域社会の期待が高まっています。

このような活動をさらに広げ、地域の課題にもっと柔軟に取り組めるようにしていくためには、生協の役割や責任を法律の中で明確にし、地域の実情に合わせて活動しやすくなる法制度に改正していくことが必要です。

生協がこれからも地域に寄り添い、持続可能な地域社会づくりに貢献していくために、生協法を見直し、規制の緩和や自治の拡大を要望していきます。



CO-OP 2028年度見直しに向けた開催の全体像

〈生協が目指すもの〉

生協がコミュニティの課題に積極的に取り組むことを通して持続可能な地域社会の発展に寄与する

〔法的措置に関する事項〕

1. 生協が地域に必要とされる役割を明確にする
2. 生協の役割を拡大する
3. 生協の役割を明確にする

〔事業に関する事項〕

1. 生協が地域に必要とされる役割を明確にする
2. 生協の役割を拡大する
3. 生協の役割を明確にする

〔組織・運営に関する事項〕

1. 生協が地域に必要とされる役割を明確にする
2. 生協の役割を拡大する
3. 生協の役割を明確にする

〔その他〕

1. 生協が地域に必要とされる役割を明確にする
2. 生協の役割を拡大する
3. 生協の役割を明確にする

ハートコープしがで、大学生が小松菜収穫体験をしました

6月6日（土）コープしがグループ会社のハートコープしがにて大学生4名が小松菜の収穫体験を行いました。学生の多くが農業現場との距離が大きく、栽培や収穫など体験を通じて、食や地域への関心を高めていただくため開催しました。

参加した学生たちは、畑での収穫作業を通じて小松菜栽培を学び、日中の暑さの中で働く農業者の方々の努力を、体験・感じてもらいました。収穫後の商品調整では「こんなに何枚も外側の葉を取り除いて、きれいな葉だけを残して販売しているのか」と、驚く場面も見られました。

さらに、コープしがの店舗から回収された発泡スチロールや食品トレーなどの資源化、および農産物残渣の堆肥化による持続可能な農業への取り組みについても学びました。また障がいのある方々と一緒に商品調整・加工作業を行い、農福連携の働きやすい職場づくりの工夫について理解を深めました。

体験後のアンケートでは、参加学生全員が「非常に良かった」「良かった」の評価でした。「農業の難しさを実感した」「普段見聞きすることのない事をたくさん学べた」といった感想が寄せられ、農業や地域共生への関心が高まったと思いました。



ユニセフ活動 ～大学生協食堂メニューと、 JR大津駅街頭募金～



6月22日(月)～26日(金)、滋賀大学・滋賀県立大学・滋賀医科大学の生協食堂で、ユニセフ募金付きメニュー「チキン南蛮」を提供し、期間中に1,406食の利用がありました。多くの学生が企画に賛同し、世界の子どもたちの現状を知り“自分たちにできること”を考える機会となりました。

また、7月8日(水)にはJR大津駅前ロータリーで街頭募金活動を行い、チラシ配布を通じて地域の皆さまから温かいご支援をいただきました。戦争や貧困で支援を必要とする子どもたちへの理解を広げる取り組みとして、今後も継続して活動を進めていきます。

核兵器のない世界をめざして 『日本政府に核兵器禁止条約の 署名・批准を求める署名』活動

広島・長崎への原爆投下から81年が経過し、世界では依然として戦争や紛争が続き、核兵器使用のリスクが現実味を帯びています。ロシアによるウクライナ侵攻は5年目となり、終結の見通しは立っていません。

また、アメリカ・イスラエルによるイランへの攻撃により、中東情勢も緊迫した状況が続いています。こうした国際情勢の中で、核兵器の非人道性を改めて見つめ直し、核兵器廃絶を求める声を社会に広げていくことが求められています。

原爆の投下された8月6日(木)はJR野洲駅、9日(日)にはJR石山駅において、通行される一人ひとりに署名を呼びかけました。

